



学校・家庭・地域をつなぐ

塩浜小 学校だより

令和2年5月27日
No.8



久しぶりに 全員で登校しました！

しおはまっ子の元気な笑い声、すてきな笑顔が、学校にもどってきました。休業中に背が伸びたのでは？と思われる子もいました。

久しぶりに、クラス全員の子どもたちが揃っての授業が始まりました。中には、久しぶりの45分間の授業に「早く、終わって欲しい～」

と思っている子もいるかもしれませんね。でも、休み時間になると、どの子もうれしそうに運動場に出て、サッカーやブランコ、一輪車などをしたりして、思いきり体を動かしています。

臨時休業中は、それぞれのご家庭で、「早寝・早起き・朝ごはん」に心がけた規則正しい生活やお子さんの家庭学習等にご配慮いただき、ありがとうございました。本校の職員たちも、授業が再開し、子どもたちに会えたことをたいへんうれしく思っています。

新型コロナウイルス感染症は、完全に終息したというわけではありません。ウイルスへの対策は、有効なワクチンや治療薬が開発されるまで手を抜くことなく続ける必要があります。1年以上かかるかもしれません。マラソンと同じで、飛ばし過ぎると途中で失速します。ゆっくり過ぎるとウイルスの勢いが増します。どうぞ、これからも不要不急の外出はできるだけ避けていただき、感染防止にご協力をよろしく願います。

6月からの日課について

5月22日のすぐメールでお知らせしましたように、授業時間を確保するため、6月より金曜日の日課を次のように変更します。ご理解・ご協力いただきますようお願いいたします。

【1・2年生】

金曜日の掃除時間(15分間)⇒掃除なし。授業に振り替える。

5限終了後下校(下校時刻の変更はなし)

【3・4年生】

金曜日の掃除時間(15分間)⇒掃除なし。授業に振り替える。

5限授業⇒6限授業へ(6限終了後下校)

【5・6年生】

金曜日の掃除時間(15分間)⇒掃除なし。授業に振り返る。

委員会・クラブの時間を教科の授業に振り替える(6限終了後下校)

なお、「国語・社会・算数・理科」の学習内容につきましては、毎月、学年だよりでお知らせします。ご確認ください。

感染防止と学力向上のバランスを取りつつ、できるだけ、子どもたちに負担のないように教育活動を進めさせていただきます。お子さんの生活や学習等のことでご心配なことがありましたら、いつでも学校へご相談ください。保護者の皆様と共に考えさせていただきたいと思っております。

社会を分断する「不安」の感染

～こんな光景はありませんか？～



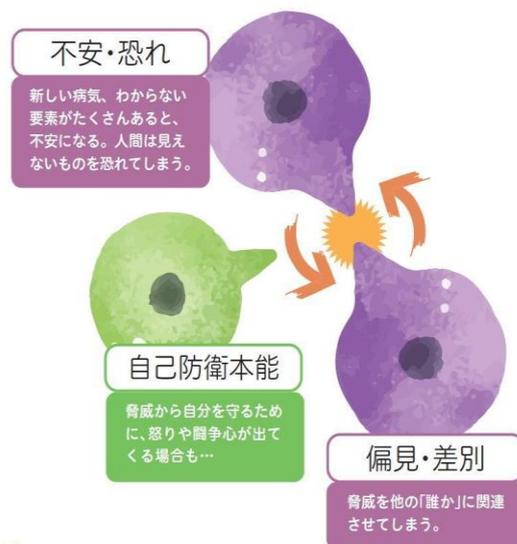
- 地域や民族特性を病気のレッテルにする
- 感染の可能性のある人に敵意を向ける
- 犯罪者扱いしたり侮辱するような言葉を使う
- 定かではない情報、うわさを広める

私たち人間は、「見えないもの、未知のもの」に対して不安や恐れを感じ、自分を守りたいという意識がはたらいてしまいます。そして、見えないものを恐れる代わりに、「目に見える物」を遠ざけることで安心しようとするのだと言われています。

今回、私たちが恐れているものは、新しい病気でまだ解からないことが多く、目に見えない「新型コロナウイルス」です。しかし、ウイルスは目に見えないため、不安が高まり、不安はストレスとなり、自分の心と体を守ろうとして……みえない敵(ウイルス)の代わりに他の「誰か」(目に見えるもの)を排除しようとしてしまいます。それが「差別や偏見」につながるのです。

今、私たちには、他の「誰か」を排除しようとするのではなく、新型コロナウイルスに対する正しい知識を持ち、正しく恐れること、正しい判断をすることが必要とされているのだと思います。人間一人ひとりはとても弱く、一人では不安や恐れに押しつぶされそうになります。だからこそ、みんなで助け合い、励まし合い、支え合うことができる、誰もが安心して暮らせる社会・学校にしていきたいと考えています。

【不安と偏見のサイクル】



「病気を恐れる心が偏見や差別を生み出し、 ウイルスの封じ込めを困難にしてしまう。」

「病気を恐れる心が生み出す偏見や差別」。これは、さらに2つの弊害をもたらす危険性もあります。1つ目の弊害は、偏見や差別が広がると、自分が非難、差別されることを恐れ、必要な相談・検査を受けることをためらってしまうこと。結果として、感染拡大を助長してしまう可能性があります。2つ目の弊害は、医療者の疲弊です。検査や治療など、最前線で感染者への対応に忙殺されている全国の医療者。しかし現在、こうした保健医療機関のほとんどが、風評被害や嫌がらせを恐れて神経をすり減らしています。未知の感染症との戦いは長期戦で「最前線でウイルスに対応し続ける医療従事者が倒れたらもうおしまい」。これがSARSやエボラ対応から人類が得てきた教訓です。彼らを忌避や攻撃の対象として扱うのではなく、むしろ応援し支えるべき対象であると社会全体で声を出すことも早期解決につながります。

(赤十字 NEWS 2020年 4月号より)